

いろいろな移動のかたち



「かすれるナビ」の画面。同じ道を通るたびに、白くかすれていく photo: Hiraoaka Toshihiro



歩く場所はそのたびに、決める。この日は隅田川沿いを歩いた photo: Kogure Tetsuo

クリエイティブになるには 起業家たちが「歩く会」 小暮哲夫

Kogure Tetsuo GLOBE編集部

京・浅草。10月の平日の朝、カジュアルな格好のグループが隅田川沿いを、東京スカイツリーを背に歩き始めた。会話をしながら歩いていく。

グループの名は「歩きながら発想する会」。企業などのコミュニティ構築を支援する会社 conecuri を経営する高橋龍征(45)が昨年10月、知り合いの経営者に呼びかけて始めた。「私自身、歩きながらツラツラと考えを消化してきた。基本的な移動の動作である歩行に、別の意味を見いだす試みだ。

この日の参加者は4人。会話を耳を傾けると、事業の話からブログの文章の書き方、身の上話まで、さまざま。「歩きながらだと、すごいアイデアが出る」と話すのは池森裕毅(41)。自ら立ち上げたネットサイト企業を売却した経験を持つ起業希望者のメンターだ。この日もビジネスの案が浮かんだという。

ベンチャー企業の財務支援会社ファインディールズ代表の村上茂久(40)は初めて参加。「散歩自体が良質な経験だなど。(コロナ禍で)オンラインで仕事でも常にメッセージを確認する。何も考えずに会話に集中する状況にならないので」

新しいコワーキングスペースを見る寄り道しながら7キロ先の築地で終了。所用で歩けなかった2人がランチに加わった。未病改善に取り組む日本セルフメンテナンス協会の運営などに携わる中村友香(38)は「会議室では防御の意識が働く。同じ方角へただ歩いていると、そのふたが取れる」。職場でも歩いてコ

ミュニケーションを取り始めたという。歩くことは、発想を生むのか。アリストテレスやニーチェは歩いて思索し、ベートーヴェンは散歩した。ダーウィンもよく歩いた。アップル創業者のジョブズは歩きながらの会議や交渉を好んだ。

「我々の研究がそれを証明した」。米スタンフォード大教育学大学院教授のダニエル・シュワルツ(64)が話す。

176人を対象に2014年、「屋内で座る」「屋内でレッドミルを歩く」「屋外を歩く」と環境を変え、タイヤなど身近なものの新しい使い方を挙げる、といったテストをした。

80%以上が歩くときに創造性が向上。歩いているときは、座っているより創造性が60%増し、屋内と屋外で結果に大差はなかった。

シュワルツによると、歩くことで「膨大な記憶で押し込まれた脳のフィルターが減り、アイデアが意識上に出てくる」「創造性を増すホルモンが分泌される」などが理由として考えられる。

ポイントは「自然に繰り返すそれ自体を考える必要のない行為であること」。たとえば、ヨガのクラスで指示通りに動こうと忙しい場合、創造性は上がらない。一方で「歩くだけで突然、発想は生まれない」とも。歩前に「スピーチをどう始めるか」といったテーマを設けておくことがコツだという。

こぐれつお 1973年生まれ。GLOBE副編集長。週末は、ランニングで計40キロあまり「移動」。途中でアイデアが浮かぶことも。



もしナビがかすれたら…… 「不便益」な移動のススメ 星野真三雄

Hoshino Masao GLOBE編集部

「より速く、より遠く」と、人類は移動に効率性を追い求めてきた。しかし、目的地に行く過程を楽しむ方がいいのでは。そんな「不便がもたらす益=不便益」を訴えているのは最先端の人工知能(AI)や自動運転の研究者たちだ。彼らの「不便な移動のススメ」とは――。

京都先端科学大教授の川上浩司(56)は、不便益を「時間がかかるようにする」「アナログにする」などで不便にすることで、「発見できる」「主体性が持てる」といった益が得られることと定義する。「『楽しいけど楽しい』のは不便益です。自身はスマホどころか携帯電話すら持ったことがないという。

もともと京都大・大学院で、AIや効率化、自動化を研究していた。助教授になった当時はバブル崩壊の後で、自動車や電機メーカーはライン生産方式による大量生産から、セル生産方式の多品種少量生産に移行しつつあった。1人や少人数で複雑な機械を組み立てるのは難しい作業で、流れ作業より不便だが、スキルやモチベーションが向上する益があると気づいた。

京大の特定教授のときは、学生たちと京都で「左折オンリーツアー」を企画した。目的地へ歩いて移動するのに右折はダメ、というルールだ。基盤の目の街なので、左折を3回すれば右折と同じことになる。左折だけを繰り返していると、いつのまにか細い路地に入り込む。「目的地へ最短で行くのではなく、回り道することで新たな発見がある」と語る。

「富士山にエレベーターができたらどうでしょうか? うれしくないですね。観光名所を次々めぐるツアーは意外と記憶に残らないが、トラブル続きのトラベルは忘れません。旅とは目的地に行く過程を楽しむことでもある。ドラえもん『どこでもドア』があったら、旅なんておもしろくないものになるでしょう」

通った道がうすくなっていくカーナビを川上とともに考えたのは、京大時代の研究室の後輩で、東京大特任教授の平岡敏洋(51)だ。速く通った道は小さな白い丸を、ゆっくり通ったときは大きな白い丸



平岡敏洋 photo: Hoshino Masao

を打つ仕組みで、同じ道をゆっくり3回通れば真っ白になって見えなくなる。「情報がナビにあると思うと道を覚えませんが、消えてしまうかもしれないとなれば覚えようとする」と発想した。

歩行者用にこの「かすれるナビ」をつくり、京都で町歩きの実験をした。学生が被験者について歩き、通ったところの写真を撮影。町歩きの後、違う道の写真とあわせてどちらを通ったか聞くと、かすれるナビを持っていた人の方がふつうのナビの人より正答率が高かった。

平岡は、いま研究開発に取り組む自動運転システムでも「不便益の視点が重要だ」と考えている。

自動運転のレベルは5段階あり、レベル2まではシステムが人の運転を支援するという位置づけだ。レベル3ではシステムが自動運転するが、緊急時には人が運転を代わる必要がある。レベル4になると、限られた条件でタクシーやバスを無人で運行できる。「レベル3になれば、運転する機会が

ほとんどなくなる人間の運転技術は落ちていく。システムが運転できないような緊急時に人が対応できないおそれがある、というジレンマを抱える。便利が害になるパターンだ」

平岡は「決まった時間に着かなければならないときに、かすれるナビは不便だが、便利になると道を覚えなくなる。どちらがいいか、多様な選択肢が求められる。ただ、自動運転は生き死にかかわるので、安全性が一番大事だ」と指摘する。人が運転してシステムが支援するかたちを基本にすれば、手間はかかるが、いざというときに人間が対応できるという。

ほしのまさお 1971年生まれ。経済部、ヨーロッパ総局などを経て現職。「GLOBEを読むと世界を旅した気分」。うれしい読者の声に、取材で聞いたことが重なった。「ネット時代の紙の新聞も不便益では」



川上浩司

プレゼント section with images of prizes (mug, bag, pen, etc.) and a QR code for a drawing.

ひとは到着するために旅するのではなく、旅するために旅するのだ (知人に語らばとされる言葉)